「日々の理科」（第 1070 号） 2017（H29),-6,11

「キジと赤色」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

国蝶は「オオムラサキ」、国鳥は「キジ（雉)」である。少し前まで、福澤諭吉の一万円札の裏面には、キジの姿が描かれていた。左側に歩く雄、右に座る雌である。平成 16 年から「鳳凰」に変わったので、このキジ一万円札はほとんど見かけなくなった。

しかし、北軽井沢ではキジをよく見かける。一万円札ではなく、本物のキジである。他の季節にもキジはいるのだが、特に春から初夏にかけては、ヒトの前にも姿をよく見せる。姿を現すのは決まって雄である。

野生の鳥類が、自分から進んでヒトの前に姿を現すことは、普通はあり得ない。しかし、キジの雄は縄張り意識が非常に高く、相手が人であっても、激しく「ケーンケーン」と鳴きながら威嚇してくる。

繁殖期のキジの雄は、顔のまわりの肉腫が赤く大きく発達する。自分の（家族の）縄張りに他の雄が侵入すると、この赤色を目じるしに追い出しにかかる。他の雄に限らず、赤い色のものはすべて攻撃対象で、郵便配達の人がキジに襲われることもある。顔まで覚えるというから、ちょっと怖い。キジの雄は攻撃性が強く、キツネも撃退、ヘビなど相手が死ぬまで戦い続けるという。ヒトの場合、とび蹴りを食らう程度だ。

キジには申し訳ないが、私は山荘の近くの森に現れたキジで、ちょっとした「実験」をしてみた。キジが遠くにいるうちに、「わざとらしく」赤い布（ピアノの鍵盤カバー）を振ってみたのだ。

キジの雄は数秒で気づき、「ケーンケーン」という鋭い威嚇声を出しながら、不気味な速度で近づいてくる。私は襲われたり顔を覚えられないうちに、家の中に逃げ込んだ。ここは登記上私の土地なのだが、キジにとっては縄張りの一部なのだろう。これは、互いに共存の道を歩むのが得策である。